



只見町は、編み物の文化が発達した特異な地で編み物の宝庫といえます。マタタビやアケビ、ヤマブドウなどの蔓を用いたもの、シナノキやウリハダカエダなどの樹皮を用いたもの、根曲がり竹を用いたもの、稲ワラやイワシバなどの野草を用いたもの等、素材だけを見ても多種にわたっています。また、編まれたものをつつて見てもザル・籠の類はもとより、背負い籠や袋の類、俵やムシロなど、あるいは帽子、蓑、ワラ沓など実に様々なものがあります。

多種多様な編み物が生み出された背景には、冬が長く、しかも深い雪に閉ざされること、真竹が自生していないこと等只見町の持つ独特な自然があります。冬が長く、深い雪に閉ざされるということは、室内での作業に適した編み物をする時間が取れ、その上湿度が高くワラ細工に適しているということが言えます。また、真竹が自生しないということは、真竹に代わる編み材を求めざるを得ず、その結果、マタタビ、アケビ、ヤマブドウなど多種にわたる素材の利用が促

されました。

只見町の編み物は、生活上必要に迫られ、利用者自らの手で作られてきたものです。したがって各自が材料の採取にも当たらなければなりません。各材料には、材料なりに生育する場所



マタタビ細工に励む故郷家丑五郎さん

があり、また、いつ採取したならば最良の材料を得ることができるといった採取の時期があります。例えばマタタビやアケビは、山裾に自生します。採取の時期は、葉が枯れ落ち、しかも雪が降る前が最適となります。

ヤマブドウやシナノキの樹皮は、木質部が盛んに水を吸い上げ皮が剥ぎやすくなる梅雨時となります。根曲がり竹は、雪が多い奥山に自生するので、採取は容易ではありません。イワシバの類は、じめじめした岩の多い斜面に自生し、秋の彼岸頃が採取時期となります。このように只見町の人たちは、編み材を、いつ、どこで、どのように採取したらよいかということを知りたてなければなりません。しかもこうした細かな事柄を、ノートなどに記録することなく、頭の中にすっきり記憶していたというから驚きです。

こうして採取した材料は、編み物の季節になるまで保存します。この保存の方法にも材料によつて違いがみられます。マタタビは、母屋などの屋根裏で保管し、編み物の時期近くになると池に浸し水分を十分吸収させます。イワシバの場合は、採取してきたものを一握りほどの束にして納屋の天井などに吊るして陰干しします。また、イワシバや稲ワラなどの草の類は、編む直前に水分を与えた後、槌で

たたき柔らかくしてから編み始めます。

イワシバやガバで編んだ物は、最後の段階として雪さらしや水さらしを施されます。雪さらしは、日差しの強くなった春先に母屋の軒差に吊るし、あるいは直接雪の上においてさらします。水さらしは、池の中に浸してさらします。こうしたさらしの工程を経たものは、夏になつてもかびることがないといわれています。オゾンの効果とも紫外線による殺菌効果ともいわれますが、長い間雪の中で暮らしてきた只見町の人々ならではの生活の知恵といえます。

近年、編み物の素材が化学繊維に変えられたり、編み物を行う人が少なくなったり、編み物そのものが使われなくなっています。自然素材は、取りすぎさえしなければ永久に採取できるものであり、自然素材で編んだ物は、廃棄後も地球環境にやさしいものばかりです。今こそ只見町の編み物文化を見直すべき時だと思います。